

III. 科学文明の闇を超え得る思考～唯識

科学技術文明社会が抱える闇を照らすものがないと、やがて人類は滅亡してゆくことになる。しかし、ひとたび近代的な理性や科学の持っている妥当性を知ってしまった我々は、かつてのような神話的な宗教にもどるわけにはいかない。そこに、現代人の深刻な問題がある。

近代的な理性や科学の世界は、分別知の世界である。この分別知を乗り越える思想と行動が重要となってくる。関山慧玄（臨済宗妙心寺開山、1277～1360）は、そのような分別知の世界を打破することをみごとに行動で示している。

師の丈室、甚だ弊漏す。雨降る毎に坐所無し。一日たちまち雨降る。師、器を持ち来りて漏る処に当てよと召す。一童子、急に竹ざるをもち来る。師、はなはだ称赞す。一童子、手桶をもとめて来る。師、罵りて曰く、「この馬鹿者」と言つて、叩いて追い出した。【正法山六祖伝、関山慧玄章】

この話は、関山慧玄が提唱をしている時に、雨漏りがしたが、その雨漏りをも法話の内容に活かして、童子（この場合は修行僧である）を指導しているのである。話の中で、雨漏りに対して、竹ざるを持ってきた童子は、全く分別心がなく、手桶を探して持ってきた童子は、雨漏りに「役に立つ、役に立たない」という分別心があった。関山慧玄は、その分別心こそは悟りを開く上で徹底的に捨てなければならないことを行動（手桶を持ってきた童子を叩いて追い出した）でもって示した。これは、



図1、ある雨の日の提唱

分別知を捨てよ、いのちを分別知で押し量ってはいけないという戒めだと受け止められる。

仏教・唯識の英知は、この分別を乗り越える思想を1800年以上も前に示した。唯識は、ニヒリズム⇒エゴイズム⇒快楽主義が、どういう意味で妄想なのかを理論的に明らかにし、かつどうすればそれを心の奥底まで克服できるか、きわめて明快な筋道を示した。

（引用・参考文献 岡野守也著：『唯識のすすめ』、NHK出版・1998年）

唯識では、世界のあり方・見え方の三つの側面、〈三相〉である。これは、アーラヤ識（第8識）とならんで唯識説の中核ともいべきものである。

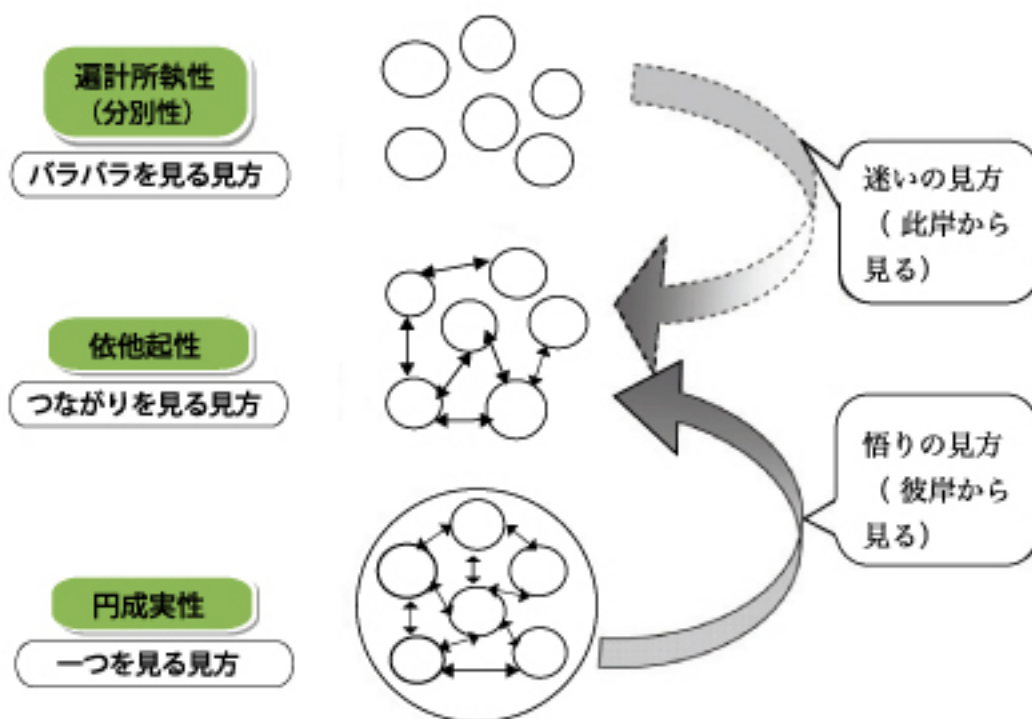


図2. 三性説について

仏教の考え方では、すべての存在は無我＝無自性＝無実体であり、それ自体で存在するものは何もない。例えば、私たちは「自分は自分だけにいる・いることができる」かのように思っているが、ここに私がいることは、例えば床に支えられていること、その床を建物が支えていること、その建物を大地が支えていること、その大地は地球全体の一部であること、あるいはその地球に空気があってそれを吸っていること、その地球の水を飲んだこと、地球上のさまざまな生命を食物として食べたこと、そのすべての生命は太陽のエネルギーを受けることによって生きていること……数えはじめると果てしのない、いろいろな「他」のものによって支えられて成り立っている。自分だけにいる自分などというものは、存在しない。

それは私だけのことではない。何かが起こっている場合、かならず他によって起こっている。それが存在の姿だ。すべての存在は、私をふくめて世界のありとあらゆるものが、それ自体では存在し得ない。いつも他によって存在している、起こっているという性格を持っている。これが存在の基本的な性格である。そのことを唯識では、<依他性>あるいは<依他起性>という。これが現実の姿である。

ところが、私たちは、いろいろなものすべてを見て、他によってではなくそれ自体として、実体として存在するという錯覚を抱く。特に自分について「おれはおれだけで存在している。だれの世話にもなっていない」という妄想を抱き、執着し、すべてのものが実体として存在しているかのように思って、それに執着する。自分もものもみな別々に分かれて、それ自体で存在しているかのように思っている。そういうものの見方や世界の見え方を<分別性>あるいは<遍計所執性>という。しかし、本当に悟った人は、ものの完全に完成した本当の姿・性質が見える。すべては、本当は一体なのだという。私もあなたも、宇宙のすべてのものは、皆本来は一つである。それを<真実性>あるいは<円成実性>という。

とはいっても、それは、ドロドロの混沌状態だということではない。宇宙の中のすべての存在は、もともとみなつながっていて一つではあるが、いちおう仮にははっきりと、私とあなた、これとそれ、いのちのいのちでない物……というふうにそれぞれ重層立体的に分かれている。分かれているからこそ、いろいろなことが起こる。



科学文明の闇を照らすもの

(前ページより続き)

私たちふつうの人間＝凡夫は、もの（者・物）がまずバラバラに存在していて（遍計所執性）、それが後で関係していろいろなことが起こる（依他起性）というふうに考えている。それに対して目覚めたひと＝仏は、まず一体の世界があつて（円成実性）、それが仮に分かれていろいろな関係を結んでいる（依他起性）と見る。どちらも、他との関係なしには何も起こらないことは認めているのだが、凡夫と仏とは、ものを見る方向がちょうど逆なのである。大乘仏教には、こうした世界のあり方・見え方に三つの性格（三性）があるとしている。図1は、＜分別性又は遍計所執性＞、＜依他起性＞、＜円成実性＞の三性の関係を示したものである。仏教では、「宇宙に存在するすべてのものは皆本来は一つである」という見方、すなわち一元論的な見方をしている。

唯識は、大乘仏教の深層心理学である。唯識からのメッセージの中核にあるものは、「分別知だけでは人間は良く正しく生きることができない。分別知を超えたより深い智慧の心をも身につけなければならない。」である。心の構造を示す。

有漏（煩惱のこ）の世界				無漏（煩惱を離れること）
				智慧
第1識	眼識（視覚）			成所作智
第2識	耳識（聴覚）			
第3識	鼻識（臭覚）			
第4識	舌識（味覚）			
第5識	身識（触覚）			
第6識	意識	知覚・感情・思考・意思		妙観察智
第7識	マナ 末那識 (無意識)	マナ 末那識（蔵識を自己と誤認する識、自己執着心、マナは、思い量るの意、自分があると思ひ量る、4つの煩惱：我痴（無明）、我見、我慢、我愛がある。）		六波羅密 という方法 により
第8識	アラヤ 阿頼耶識 (無意識)	アラヤ 阿頼耶識（蔵識、命にこだわる心、異熟）→DNAにある遺伝子情報と重なる。生命情報の世界、暴流の如し、善悪の種子の倉庫、情報の集積体、行為はすべてここに薰習される。フロイトのリビドー（性のエネルギー）との対比で生命エネルギーといえる。 【心の最深層】		大円鏡智

成唯識論によれば、煩惱の世界から悟りの世界へ行くためには、転識得智することであると説く。智に依って識を捨てしめんがゆえに、八識を転じてこの転識得智四智を得と説く。（識：区別して知ることをいう。この知るとは、対象を得ることであり、その作用を了別と

科学文明の闇を照らすもの

という。) 四大智慧を得るにつれて自在となる。

清水博氏(場の研究所所長)の考え方では、「阿頼耶識は人間がそれぞれの無意識の領域に受け継いで持っている過去の経験の記憶の貯蔵庫に相当するものです。その中には自分自身のこれまでの人生における経験ばかりでなく、無始以来さまざまな祖先が経験してきた記憶も所蔵されていると考えられています。言葉を変えれば、DNAを通して伝えられる経験、社会的影響の形で伝えられる経験も含まれているのです。このために阿頼耶識はいま生きて自己自身の意識を遙かに超える超越的な他者としてのほたらきをもっています。これが、「自己の内なる超越的な他者」です。この自己の内なる超越的な他者のほたらき(他力)によって自己の存在が救われると考えるのが、浄土真宗大谷派の近代的教義です。浄土真宗は法蔵菩薩が四十八の願を立てて修行をし、それが成就して阿彌陀仏になったという神話をもとにした仏教の宗派ですが、近代になって「法蔵菩薩は阿頼耶識なり」という曾我量深の有名な言葉によって、この神話の真の意味が明らかにされました。」となります。

一方、ニヒリズムは、すべてが結局ばらばらのモノにすぎないという錯覚から生まれている。しかし事実として、宇宙は私たちの心を生み出したもので、その心を含んでいるのが本当の全宇宙であり、宇宙と私たち・私たちの心はつながっていて一つですから、ただのばらばらの物質だけだというわけにはいきません。確かに物質をベースにはしていますが、それにとどまらず、なぜか生命を生み出し、心を生み出し、それらすべてを含んでいる宇宙が、リアルなこの全宇宙なのです。

また、実際のニヒルな感情は、世界や人生が錯覚に基づいた自分の思いどおりにならない、エゴの望むような意味を持っていないという、失望・絶望感です。どちらにしても、ニヒリズムは錯覚である。

またエゴイズムは、私が私だけで私だけのために存在する実体だという、分別知の錯覚から生まれている。しかし事実として、私はもともと他のすべての存在と果てしなくつながっていて一つのものとして、ある一定期間、私というかたちを取るのである。それに深く気づくと、理論としても実感としても、エゴイズムは成り立ちようがない。

そして、ニヒリズムとエゴイズムという錯覚に基づいて、さらに人生は結局自分の快楽を追求するしかないという考え方・生き方に陥っていくのが快楽主義ですが、もはやいうまでもなく、これは錯覚に錯覚を重ねた大錯覚である。

しかし私たちは、ただ死んだら元のばらばらのモノに分解して、すべてがおしまいという存在ではない。全宇宙の働きは、私たちが自分で勝手に考えるような意味は超えているが、自らの一部である人間を通して意味を生成・発展させているのである。であるから、宇宙の進化全体がどこに向かおうとしているか、その中で人間にどういう役割を果たさせようとしているか、古い言葉でいうと「天命」の自覚によって、生と死の意味が見えてくるのだと思われる。

つまり、人生には意味がないから快楽を追求するしかないというのは悲しむべき錯覚であり、実はあらゆる人の命はもともと天命であり、その具体的内容を発見・自覚・実現するときこそ、本当の人生の意味が成就する。

こういうふうに見ていくと、二十世紀が解決できなかった、それどころか深刻化させて次の世紀に残すことになる三つの問題(戦争、環境破壊、物質還元主義)にはすべて、その奥に分別知一遍計所執性の心の問題が潜んでいたことになる。

それに対して唯識は、そういう分別知の限界をみごとに理論的に明らかにしていて、どうすれば心の奥底まで分別知を克服できるのか、非常に明快で実践的な筋道も示している。

だとすると、まず唯識一仏教に出会って、分別知・八識の心の限界に気づいた個人から始めて、やがて気づいた人々のグループ、それからそのグループが広がるに連れて、大きな文化潮流になり、国全体に、そしておそらくやがては人類全体にというふうに、ステップを踏んでいくことになるであろうが、人間が分別知だけの段階から、分別知を超えた縁起=依他起性の智慧に深まっていく。そして、

(次ページへ)

(前ページより)

それがさらに深まって、無分別智に到達する。無分別智に到達したらそれで終わりなのではなく、さらに般若後得智に至る。そして、人類はばらばらに存在しているのではなく、つながって一つでありながらそれぞれであることを見て、それぞれとつながりと一つのすべてのバランスをとることができるようになる。そして人類間の平和、自然との調和、そして意味のある生死を実現することができる。

IV. まとめ～空外上人の講演より～

この唯識論について空外上人は次のように説かれている。(引用・参考文献龍 飛水編著：『20世紀の法然房源空～山本空外上人聖跡素描～』、無二会発行・2009年)

物やお金がどれくらい大切であっても、それらには限界がある。今日の欧米先進国や日本のように物に恵まれた工業国では、人心が荒れてわけのわからぬ凶悪犯罪が多発し自殺者が増える傾向がある。家庭は暖かさを失い、学校や会社でも言動における人としての品性に問題が生じることが多くなって、社会全体に不安感が漂っている。

このような生活をたて直せるのは、健康食品とか無農薬の農産物、いろんなサプリメントなど、またフィットネスセンター通いといった物やお金による方法だけではおぼつかない。外面の計算で出来ることによる手だてだけでは、内面のくらしにかかわれる範囲が限られているからである。そうなるが最早、心の他にはないことは自明である。これを唯識真如と叫んでいるのだが、識は、全部で八種の識を数える。眼耳鼻舌身という五つの感覚器官に対応する五つの識と、それらの識によって見聞覚知するのをまとめる識として、第六番目に意識がある。それ自体も感覚器官でもあるが、それら六つの器官は他ならぬこの私だという自我意識を、第七番目、マナ識と称している。

これら七つの識の土台となっているのが第八識・アラーヤ識である。超意識ともいわれるように、言葉では追いかけれないし、自分でも見当がつかない、無意識の世界である。一面では、一個の生命体としてこの地上に出現して以来のすべての生命情報が蔵されているという意味でアラーヤ(蔵)というが、他面それは宇宙全体にわたってひろまり、深まるいのちのつながりをもつという。心というときは、この識を指す。

この心が、何ごとも自分勝手に損得打算して外形のみかけに執着する方向(虚妄の暈計所執性)に働くのを転換し、自然に随順して生き甲斐の円満に成就される方向(真実の円成実性)へ限りなく進めていくのは智慧による。智慧というインド語は pra(～に向かって) jñā(智)と記す。智慧の前進によって、各人のくらしはかぎりなく豊かに浄らかとなる。これを往生浄土というが、その中味に当るのが唯識真如である。その心杖としてのナムアミダブツで一息ごとに、虚妄の染を転捨して、真実の浄を転取するという意味で「二転依」という。一人ひとりなりに、こうして心の深まりに応じて悟入する「転依」こそ、人間生活の実りというべきで、財や地位などに左右されることに終わる人生では、外形だけのことになる。転依してはじめて人生本来の面目に徹する。毎日の生活で、転依のかぎりをつくして、人生は終わっても、終わることなき永遠の光が照らしつづける。

このように智慧の限らない前進によって、自他の対立から自他の平等へと進化するゆえんを、各人がそれぞれなりに各自の日常生活上にみらしうることを転識得智【迷い(識)からサトリ(智)への転換】と叫んでいる。

迷いを突き抜けてサトリの生活に徹していくには、「八識を転じて四智を得る」しかなく、すでに釈尊はこの範を示された。わが国では、法然上人に続いて、近くは弁栄上人もこの「四智」に悟入し、前向きの光明主義を提唱された。

空外上人も三昧発得の悟境を不断念佛で楽しむ日常生活において、その実例を示された。

科学文明の **闇** を照らすもの

空外記念館理事長 江角 弘道

00_5

